



子ども大学学生新聞

第39号
子ども大学
かわごえ新聞部

心にびびき感動させる芸術作品

荻原延元先生「感性をはぐくむ美術鑑賞」

二〇一七年九月二三日(土)午後二時から東京国際大学第一キャンパス三二四教室で、日本画家で川村学園女子大学特任教授の荻原延元先生による「感性をはぐくむ美術鑑賞」の授業がありました。出席者は四年生五三人、五年生四七人、六年生四四人の計一四四人でした。

先生は初めに美しいものだけでなく、不思議なもの、怖いものも芸術。心の中心の思いを表現するのが芸術です」と話した上で、日本や西洋の名画四〇点を順にスクリーンに映して、



「子ども」がテーマでした。お母さん

と子どもを描いた絵の説明がありました。アメリカの女流画家メアリー・カサットの絵と、日本画家・上村松園の絵が映され、母子のようすや表情がちがうことを指摘されました。ほかにピカソの「初めての雪」、フェルメールの「真珠の耳飾り」など有名な絵の紹介がありました。つぎのテーマ「動物・鳥・魚」では、「鳥獣戯画」が紹介されました。一〇メートルもある巻物を広げて説明がありました。カエルがウサギとすもむをとっていたりして、おもしろい絵でした。

日本人と西洋人は感性がちがう

一時間目も、一時間目に引き続き、日本画、西洋画、彫刻などの優れた作品約三十点の絵をスライドで紹介されました。「美しい季節と絵のものがたり」をテーマにした絵では、ブリュッセルの「冬の狩人」や、ボツテイチェルリーの「春」、日本画家・奥村土牛の「精進湖」などを見ました。「浮世絵」では、葛飾北斎の「神奈川沖浪裏」が登場しました。大きな波の向う

うに富士山が小さく描かれた絵が、すばらしかったです。

最後のテーマは「不思議な絵・彫刻」。縄文土器からはじめて、「阿修羅像」「風神雷神」、ロダンの「考える人」、レ



オナルド・ダビッチの「モナリザ」などを見ました。そして最後に川越出身の画家・小茂田青樹の「虫魚画巻」(夜の昆虫)が紹介されました。

絵の描き方には遠近法があること、描く絵は、すべてをぬりつぶしたりしないこと、名画は大きくしても、きれいに見えることなどを教えていただきました。絵の中では、見た物をそのまま描くのではなく、うそをついてもいいそうで、おもしろいと思いました。浮世絵は、絵師彫り師、摺り師が作っていました。みんな協力して作るなんて、びっくりしました。これからの絵の描き方に参考にしたいです。

(吉田真奈記者) 坂戸市勝呂小5年
同じモチーフでも、日本人と西洋人では、全くちがう構図や感性でとらえ、描くおもしろさを伝えてくださいました。「人々が大切にしてきた芸術作品は、人

を感動させる力もち、心に響き伝わる何かをもっています」という先生の言葉を、これから美術鑑賞をするときに意識したいです。
(高橋るり子記者) 霞ヶ関南小6年

☆荻原先生にインタビュー

高校三年のとき画家になろうと思った

Q いつ、画家になろうと思ったのですか。

A 高校三年生のときに「鳴門」を見て感動し、日本画家になろうと思った。「鳴門」は日本画家・奥村土牛先生の作品で、淡路島と四国の間にある鳴門海峡のうずしおを大きな画面に描かれていて迫力があります。静かな感じもあり、とても感動したものです。そこで奥村先生がおられた武蔵野美術大学に入って日本の勉強をしました。

Q 絵は描くのが好きですか、それとも見るのが好きですか。

A 描くのも一〇〇%、見るのも一〇〇%、好きです。

Q (塩野 真記者) 川越西小4年
画家では、だれが好きですか。

A 日本人は塩出英雄先生、外国人ではルネ・マルグリットさんです。

Q とくに好きな美術品は何ですか。

A 塩出先生の「愛禽小涅槃像」です。ふつうの人は、このような絵を描かないからです。

Q (秋山花那記者) 鶴ヶ島二小6年
先生は絵で賞を取ったことはありますか。

A 個展なら五回くらいあります。

